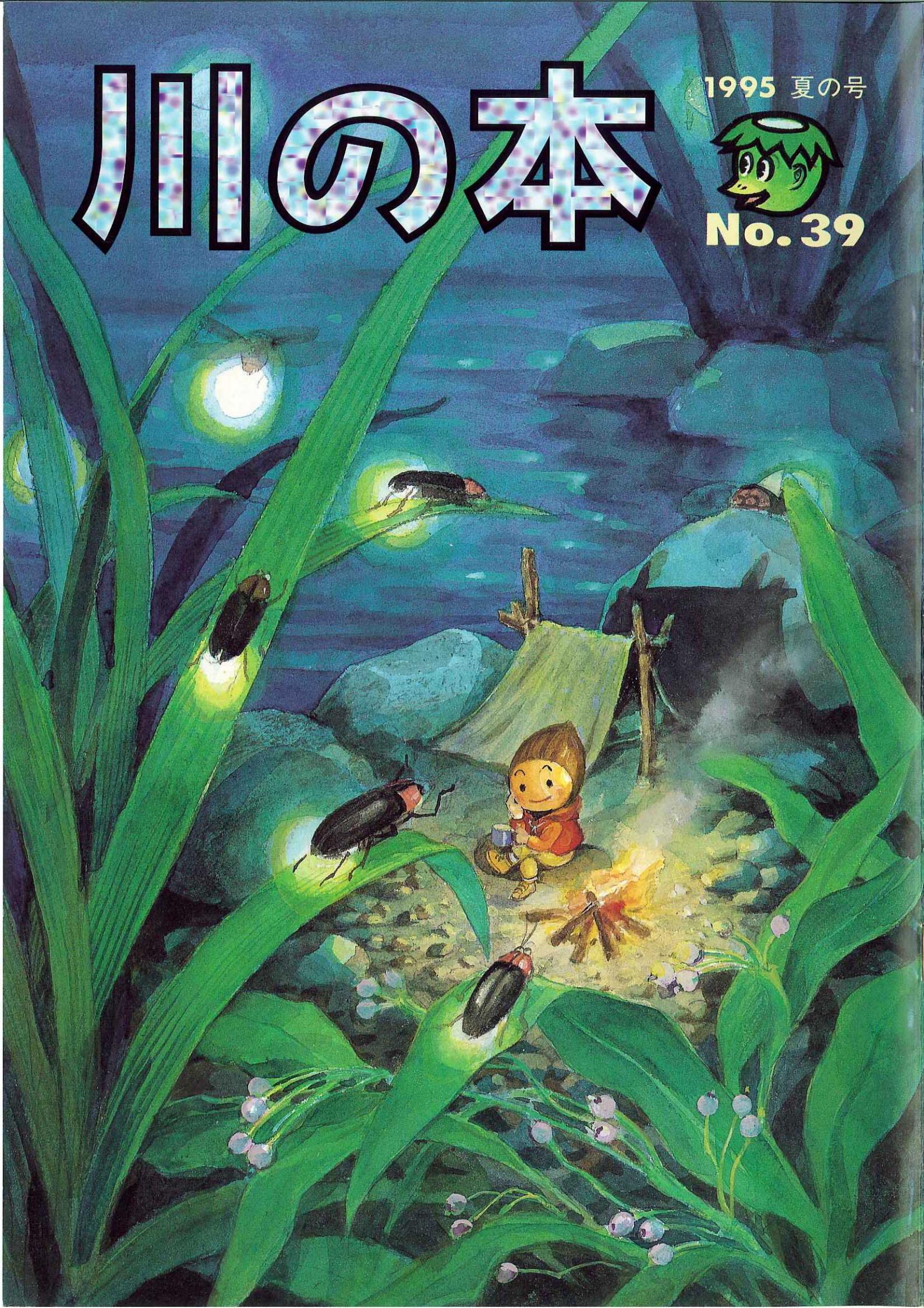


川の本

1995 夏の号



No. 39



ふるさきかわかなねいろ 情色吹川の悲心と音色



むかし、むかし
芹沢の里とよばれる山おくの村に、ごんざぶろう という わかもの
が、お母さんと二人きりですんでいました。

ごんざぶろうのお父さんは、たかいみぶんの人でしたが、
たたかいにやぶれ、甲斐の国にのがれたという うわさがありました。
このお父さんをさがしあるいて、ごんざぶろうとお母さんは、この地ち
まで、ようやく たどりつき、かりずまいをしている身みでした。
二人がすむ小さな家は、谷間たんの川かわぞいにありました。
川は、甲斐の国くにを流れくだつていましたから、二人はこの川かわにそつて、
お父さんをさがそうとしていたのです。

けれども、お父さんは、なかなか見つかりません。むなしく歳月としつきがすぎ
てゆきます。お母さんはもう、すつかりつかれているようでした。
しかし、お母さんは、一つだけ、こころのなぐさめがありました。

それは、ごんざぶろうがふく、笛フルートの音ねでした。
山の鳥とりでさえ、ききほれるほど それは それは みごとなものでした。

お母さんは、ごんざぶろうの笛フルートをきくのを なにより、たのしみにし
ていました。ごんざぶろうも、お母さんのために、こころをこめて笛フルート
をふきました。

それに、お母かあさんをたすけて、よく はたらきました。
ごんざぶろうのそんなすがたを、村むらの人ひとたちは、おやここうの
見み本ほんだと、ほめたえておりました。

ある年としのことでした。もう秋あきだというのに、台風たいふうがつぎつぎとやって
きて まいにちのようにはげしい雨あめがふりつづきました。
ごんざぶろうの親子おやこは、もうなんにちも家いえにとじこもつたままでした。
家のそばを流ながれる川かわからは、ぶきみな水音みずねが、ごうごうと ひびいて
きます。

「お母かあさん、ちょっと 川かわのようすを見てきます」
ふんになつて、そとにでた ごんざぶろうは びっくりしました。
じぶんの目めをうたがいました。

ふりしきる雨のなか、しぶきをあげ
あれくるつてながれる川は、
今まで、見たこともないおそろしいすがたをしていたのです。
ふだんは、つい見とれてしまふほどのうつくしい川が、まるで
きばをむいたりゅうのように見えるではありませんか。

「お母さん、ここにいてはあぶない、もっとたかいところへうつ
りましよう」

「たかいところといつても、この雨のなかどこへゆけばよいので
しょう」

二人がはなしあっているときでした。
ドドドドッとすさまじい音がして、滝のような水がおしよせてきたのです。あつという間に、家は、こなごなにつぶされ、二人は、あれくる川にのみこまれてしまいました。

「オカアサーンツ、オカアサーンツ」

さかまく波にもまれながらごんざぶろうはひつしになつて
さけびつけましたが、お母さんのすがたは、もうどこにもあります
せんでした。

雨がやみ、きのうのあらしがうそのように秋晴れの空がひろがりました。しかし、河原には、大きな石がごろごろしていて、まだにごつた水がざわざわとはげしく流れています。
その河原を川下にむかってお母さんをさがしてまわるごんざぶろうのすがたが、いつまでも見えました。
それから、何日も、何日も、すぎました。それでも河原にゆくと、かならず岸辺をさまようごんざぶろうのすがたがありました。
ごんざぶろうは、夜になつて、あたりが見えなくなると笛をふきました。お母さんがだいすきだった笛をふきました。

「ああ、今夜も、笛ふきごんざぶろうがふいているあわれじやう」

ごんざぶろうの笛の音は、いつも、人びとのなみだをさそつておりました。りりしかったごんざぶろうも、このころには、かみのけはボサボサにみだれ、きものは、ぼろぼろ、手も足もきずだらけ、すっかり、やつれはっていました。
そして、ある日、とうとう、笛の音はぴたりときこえなくなりました。川下の小松の河原で、ごんざぶろうがかわりはてたすがたでみつけられたのは、それからまもなくたつてのことでした。



その手には、しっかりと笛がにぎられておりました。

あわれんだ人たちは、ごんざぶろうのなきがらを、長慶寺にてあつくほうむつてやりました。

「もう、ごんざぶろうの笛は、きくことは、できんのう」と、人びとはさびしく、はなしあつていました。

ところが、それからしばらくして、夜になると川の流れのなかから、笛の音がかすかにきこえてくるようになりました。

それは、かなしいほどうつくしい笛の音でした。

それからというもの、だれいうとなく、この川を、笛吹川とよぶよ

あばれ川がうんだ、かなしいお話

笛吹きごんざぶろうのお話は、大雨による洪水からうまれたお話です。ふだん、やさしく流れる川も、ひとたび洪水をおこし、あばれ川になると、どんなにおろしいかが、このお話をからもよくわかるとおもいます。ごんざぶろう親子がすんでいた芹沢の里は、笛吹川の上流の谷間にあって、りょうぎしにはふかい山がせまっています。このようなところでは、大雨などがふると、あつというまに谷川の水かさがふえ、滝のような流れになるのです。

大昔から洪水のたびごとに、笛吹川は、土砂をおし流しほそながい扇状地をつくり甲府盆地に流れこんでは水害をおこしていました。

笛吹川が山からぬけだした山梨市の差出の磯と、重川、日川、笛吹川の三川が合流する近津堤付近はとくに被害が多く、竜王となんで甲州の三大難所に数えられています。ここには、武田信玄がきずいた万力林と名づけられたりっぱな水害防備林や、ふるい堤防のあとが、のこっていて、いまも洪水から甲府盆地をまもっています。笛吹川にかぎらず、甲府盆地を流れる川には、あばれ川をなだめるために、こつこつと治水の仕事をつみかさねてきた人びとの業績がたくさんのこっています。

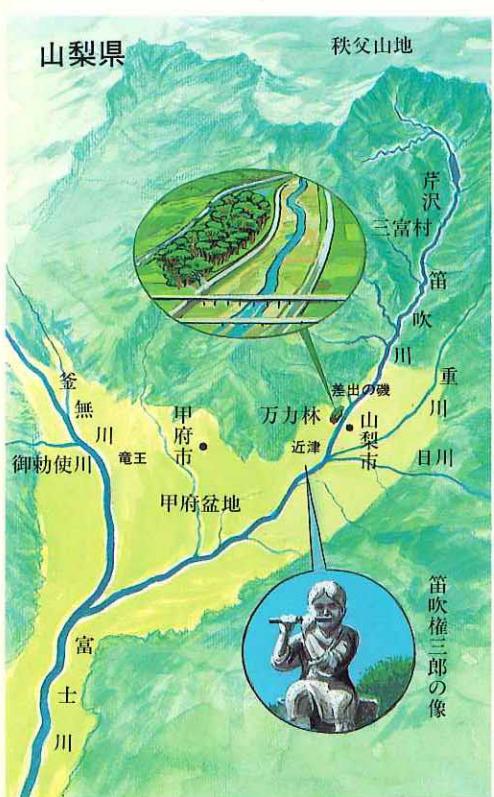
さて、お話をふるさとをたずね、笛吹川を源流までさかのぼってみました。こわいあばれ川とはうらはらに、笛吹川は、さかのばればさかのぼるほど、おもわずハツと息をのむ美しさでむかえてくれました。

溪流のすんだ水音に、心まであらわれるようです。

人を苦しめるあばれ川とはとても考えられない美しさです。しかし洪水のたびに運びだされた肥沃な土で、豊かな甲府盆地ができたこともたしかなことです。だからこそ人びとはこの川のほとりに住み、川にくくるしめられながらも、川をにくまず、川とともにくらしてきた、人びとの心のやさしさまでが、わかるような気がします。

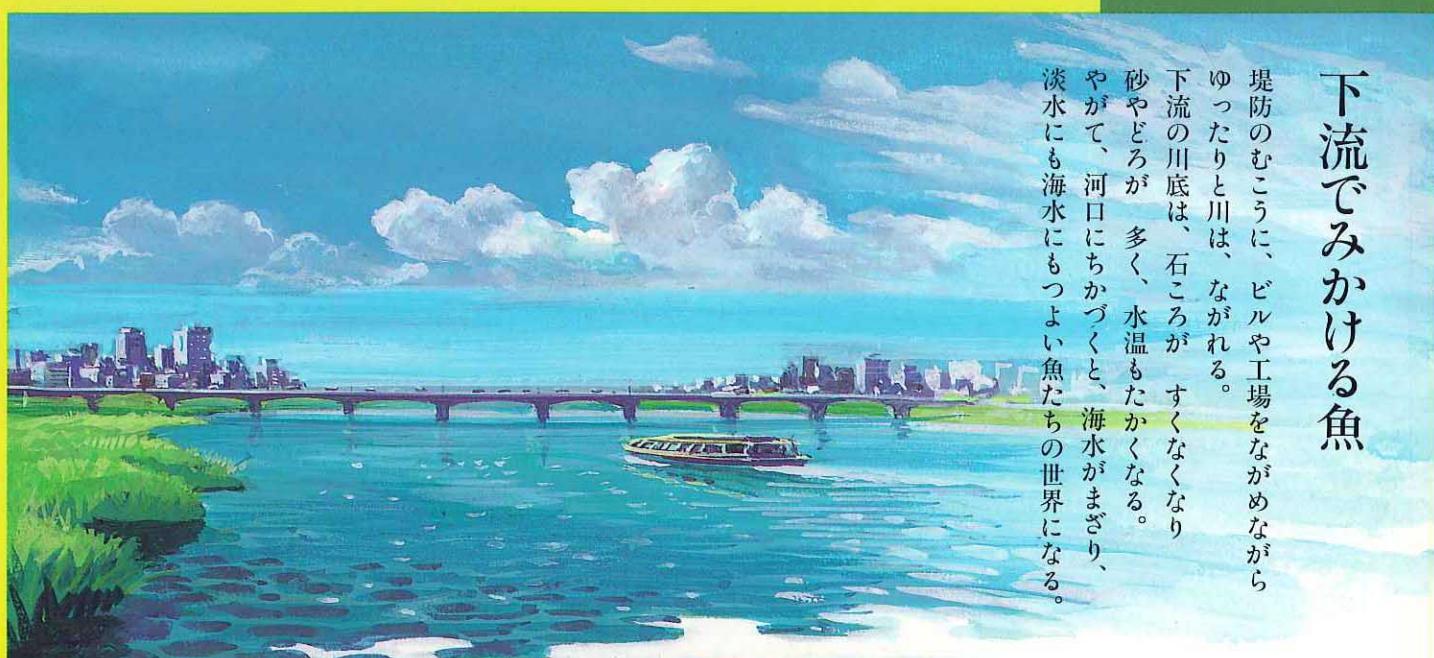
中流の川ぞいにたつ、ごんざぶろうの像にたちよつてみたら、

だれがおいたのか、みかんが一つぱんとそなえてありました。



下流でみかける魚

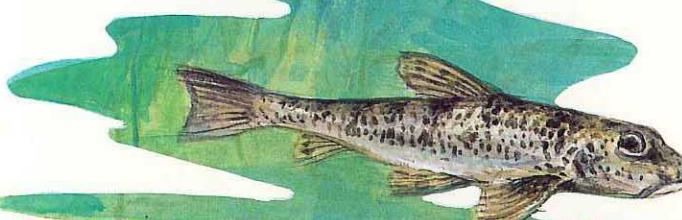
堤防のむこうに、ビルや工場をながめながら
ゆったりと川は、ながれる。
下流の川底は、石ころがすくなくなり
砂やどろが多く、水温もたかくなる。
やがて、河口にちかづくと、海水がまざり、
淡水にも海水にもつよい魚たちの世界になる。



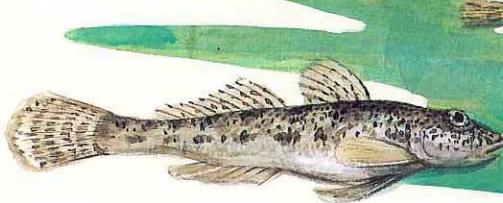
ボラ [ボラ科] 全長60cm

内湾など沿岸の浅いところにすみ、小さいときは、
川をさかのぼる。

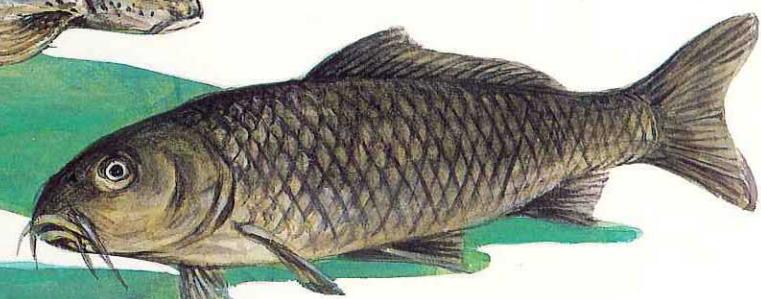
おおきくなるにしたがって、呼び名(地方名)がかわる
出世魚。2~3cmでハク 3~18cmでオボコ
16~30cmでイナ それ以上がボラ
60cmほどにも大型になるとトド、ドヒとよばれたりする。



カマツカ [コイ科] 全長20cm
中流から下流、かんがい用水路にもすむ。
えさを砂ごとすいこみ、
エラ穴から、砂だけをはきだす。

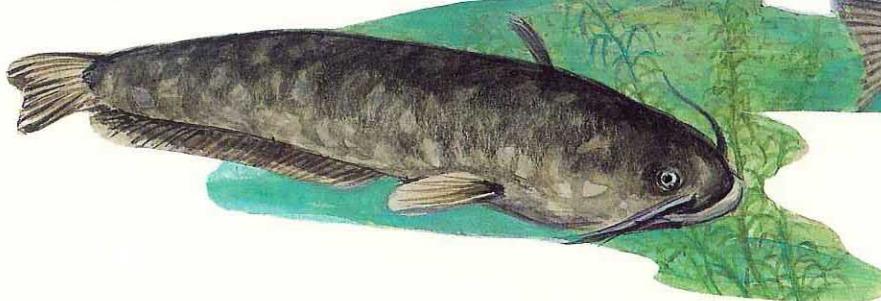


マハゼ [ハゼ科] 全長13~20cm
川の汽水域や内湾の底が砂やドロになっているところに
すんでいる。天ぷらにするとおいしい。



コイ [コイ科] 全長60cm
下流の代表的な魚だが、中流、池、湖などすむ範囲は
ひろい。ひかくてき よごれた水にもつよい。

ナマズ [ナマズ科] 全長60cm
池、沼にもすむ。
小さな魚だけでなくカエルなどもたべる。
地中の電流にびんかんなので、地震の予知ができるなどと
いわれたりしている。ヒゲがじまんだ。



ギンブナ [コイ科] 全長25cm
マブナともいう。
川底の小さな生き物やコケ、草などをたべる。
よごれた水にもつよく、池や河口にもすむ。

下流では、魚の種類もおおい。メダカ、サヨリ、など小さなものから、コクレン、ハクレン、ソウギョ、スズキなどの大型の魚にもあえる。

ガリバーになろう

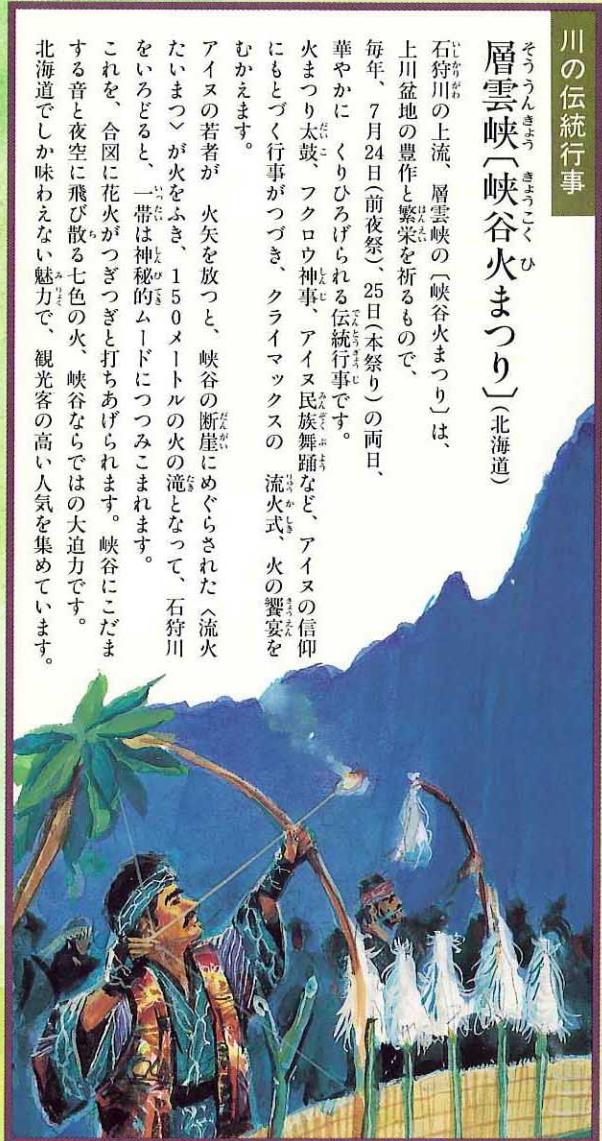


まてまて
かならず
とってやる

おさかな
とつよ
早くとつよ

おもいつきり 水とあそべる 川原へきました。
トンボがいる、バッタもいる、サカナもいる。
石ころをつんで、おしろをつくつたら、まちも つくりたくなった。
川もつくりたくなつた、はしをかけ 水車も つくるう。
そうしたら、いつのまにか、コビトさんのくにができました。
みおろすと、ガリバーになつたきぶんだ。

あそびおねつたら
できるだけ、もとどおりに
かたづけよう。
ゴミはかならず もちかえろう。



LOVE RIVER

川へ行くときの注意

でかけるときは、行先を家のひとにつけておく。なるべく、おとなの人と行く。

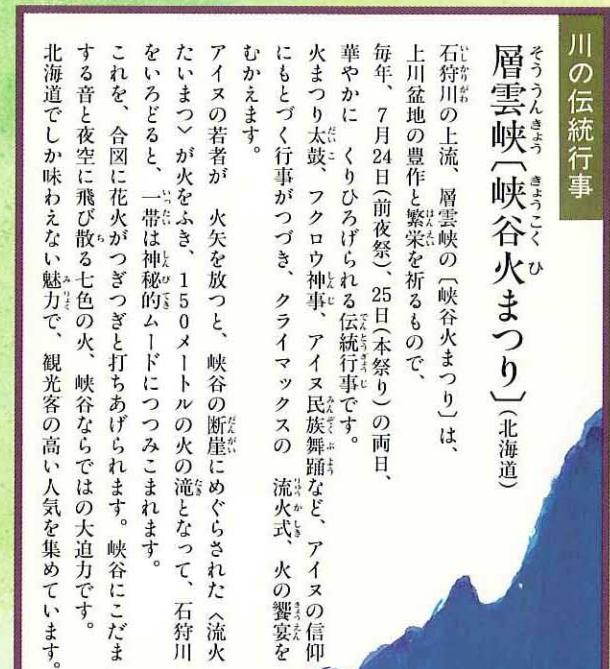
ともだちどうしで行くときは、3人いじょうさそいあわせる。川の流れをよくかんさつして、深そうなところや流れのはげしいところなど危険なところがわかったら、ともだちにおしえてあげよう。

雨のあとなど、川が増水しているときは行かない。

危険をしめす掲示板などがあるところはさける。

あきかんやごみをすてないように。

もっていったものはかならず、もちかえろう。



川原でテントをはる時の注意



川には、危険な場所がある。

川では、場所によっては、危険区域が指定されている。

そのような区域は、ぜったいさけること。ダムの放流や夏の雷雨によって川が急に増水することがあるから、水辺にちかすぎるところや中州なども、危険だからさけよう。

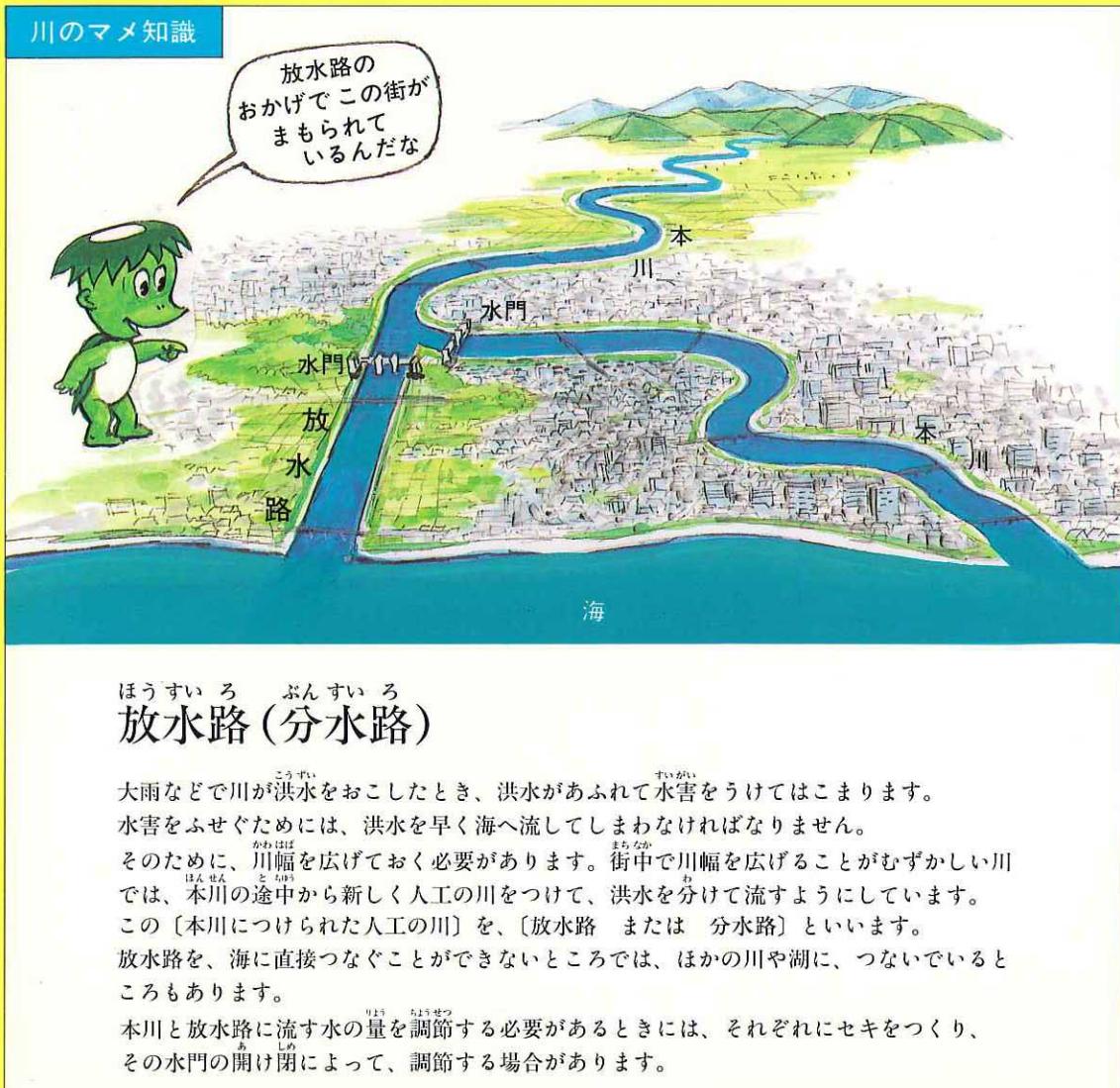
初心者には[キャンプ場の利用]が、おすすめ。

安全だし、便利なことがおおい。

ベテランもいて、いろんなことを、おしえてもらえる。



川のマメ知識



放水路(分水路)

大雨などで川が洪水をおこしたとき、洪水があふれて水害をうけてはこります。水害をふせぐためには、洪水を早く海へ流してしまわなければなりません。

そのために、川幅を広げておく必要があります。街中で川幅を広げることがむずかしい川では、本川の途中から新しく人工の川をつけて、洪水を分けて流すようにしています。この【本川につけられた人工の川】を、【放水路 または 分水路】といいます。放水路を、海に直接つなぐことができないところでは、ほかの川や湖に、つないでいるところもあります。本川と放水路に流す水の量を調節する必要があるときには、それぞれにセキをつくり、その水門の開け閉によって、調節する場合があります。

河川愛護月間

7月1日→31日

8月1日は水の日です

河川環境管理財団は

みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- *よりよい水辺のプランニング
- *楽しく安全に遊べる川づくり
- *川をきれいに、川を愛する心を育む運動
- *未来の水辺を考えた調査や研究
- *せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修 建設省河川局

財團法人 河川環境管理財団

Foundation of River & Watershed Environment Management
(〒104) 東京都中央区入船1丁目9番12号
TEL.(03)3297-2600(代表)